

平成 20 年度第 2 回協議会総会議事録（案）

日 時：平成 21 年 3 月 27 日（金） 15 時 00 分～17 時 25 分
場 所：東京機械製作所本社ビル 6 階 第 4 会議室（港区芝 5-26-20）
出席者（順不同、敬称略）：

協議会長 桑原 洋（日本工学会副会長、日立マクセル）
担当理事 橋谷 元由（化学工学会）
会員代表 田中 良彦（空気調和・衛生工学会）、奥津 良之（計測自動制御学会）、
武田 裕久（ターボ機械協会）、伊藤 政人（地盤工学会）、
児玉 孝亮（電気学会）、持田 侑宏（電子情報通信学会）、
大島 一哉（土木学会）、柳田 三徳（日本応用地質学会）、
村上 俊明（日本機械学会）、真木 康守（日本建築学会）、
伊藤 眞義（日本ゴム協会）、荻原 誠功（日本船舶海洋工学会）、
関田 真澄（日本冷凍空調学会）、秋山 誠（日本技術士会）
運営会議委員（会員代表との重複を除く。）
川島 一彦（東京工業大学）
事務局 柳川 隆之

配布資料：

G20-2-1：平成 20 年度第 1 回協議会総会議事録（案）
G20-2-2：平成 20 年度第 2 回運営会議議事録（案）
G20-2-3：CPD WG 検討報告書
G20-2-4：平成 20 年度報告書：ECE プログラムの必要性と要件に関する検討
G20-2-5：各 WG における次年度の計画の検討結果
G20-2-6：平成 21 年度事業計画および収支予算
G20-2-7：委員名簿

議 事：

橋谷理事の司会の下に議事が進められた。

1. 前回議事録確認

昨年 6 月 30 日に開催された平成 20 年度第 1 回の協議会総会の議事録案を確認した。また、昨年 12 月 15 日に開催された運営会議の議事の概要が事務局から説明された。

2. WG 活動報告

1) CPD WG

関田主査から、CPD のガイドラインのうちの総括部分の検討結果が報告された。議論の結果、次の点についてさらに検討を加えることになった。

- (1) 言葉の使い方をさらに検討する。
- (2) 会員には情報提供のポータルサイトへの期待があり、開発の可能性を検討する。
- (3) CPD の全貌と今後の CPD 協議会の進むべき方向、すなわち現在はこの点が未解決で、協議会は将来どうするかということ、をガイドラインに盛り込むことを検討する。そのために、個々のプログラムの目指す目的を整理・分類することを考える。

議論の概要は次の通りである。

(1) 用語について

ガイドラインができるとうい。ただ、まえがき部分の「体制」、「傘下」、定義部分の「分野別 CPD 協議会」や「CPD 実績」など、用語をよく検討してほしい。（奥津）

⇒言葉の使い方はもう少し練る必要がある。（橋谷）

(2) ポータルサイトについて

ポータルサイトを提供してもらえることに期待していたが、放棄したのか？電気学会では1回のクリックで一覧表が出てくるものがほしい。データフォーマットが統一できるとこれができる。(児玉孝)

⇒大掛かりなものは開発費がかかるので、会員のページにリンクを張るくらいではどうかと考えている。WGで検討する。(橋谷)

(3) ガイドラインの目的について

*CPDの全貌の中で、学協会は何のためにやるのか、企業はどのようなところを受け持つのか、という基本的な目的をガイドラインに入れてほしい。技術者が雇用者に対し自分を売り込み、雇用者がこれを尊重するようになるためには、プログラムの性格の細かい整理が必要である。断定的な書き方は難しいが、検討の必要性だけでもガイドラインに載せるとよい。(末尾に文案を示す。)(桑原)

⇒講習会、論文作成、委員会参加など、ある程度整理はされている。体系も一応あるし、グレードの分類もある。(橋谷、川島)

⇒どういう研修で何ポイント、こういう分類の研修では最大何ポイントまでしか認めないという形の調整は現在でもある。(関田)

*今のところは各学協会でごこまでやられている、工学会は将来こういうことを考えてゆくということをガイドラインに示せないか。(桑原)

⇒後発の団体ほど分化している。全体としてどうして行くかを示せるとよい。各学協会がその特徴を主張しやすくなるような仕組みを作れるとよい。(川島)

⇒盛り込むことを検討する。(橋谷)

(4) CPD実績の保存について

*CPD実績は最低5年間保存するとなっているが、5年間たったらなくなってしまうのか？(川島)

⇒学協会としては5年間は保存してほしいということである。それ以降は個人の責任である。(関田、伊藤)

⇒記録媒体の進歩にもよるが、学協会が持つべきか個人が持つべきか議論が必要である。(川島)

*自分の証明には全部の記録をほしがるであろう。学協会はその証明する責任が出てくる。CPDが立ち上がり期を過ぎた後はこういう必要が出てくる。(川島)

*電子情報通信学会ではウェブサイトのマイページで自分の歴史に残したいと思うものを長期間保存するようにしている。学会の委員就任歴などは自動的に入力されるようにしており、CPDポイントもここに入るようにする。学会のサービスになる。(持田)

*CPDポイントとして、会社の業務を社会貢献に入れるかどうかの議論があり、土木学会では入れている。WGでどうするか議論してほしい。(大島)

⇒以前はこの件もガイドラインに含まれていた。入れていいとなっていた。(関田)

2) ECE WG

川島主査から、2年間にわたるECEのFeasibilityに関する検討結果が報告され、総会に対して更に先を検討をする価値があるかどうかの判断が求められた。議論の結果、次の申し合わせがなされた。

- (1) 検討だけではこれ以上前へ進まないの、行動に移してその中で考える。
- (2) 行動としては、プログラムの開設のまえに、プログラムの設計を行って考え方をまとめるというクッションをおく。
- (3) 設計するプログラムとしては、業界にとってメインのテーマがよく、ナノテクと建設系を取り上げ、5月までに資金調達の考え方を含めてどう動くかの計画を作る。

議論の概要は次の通りである。

- * ナノのプログラムを始めるためにどのくらいお金がかかるのか？（桑原）
⇒ 工学会自身では力がないので、応用物理学会や電子情報通信学会など学協会にお願いする。また、一から始めるのではなく、政府レベルや産業界レベルの既存のグループと連携してレベルが高いものを企画できないか考えている。例えば、JST や COCN であり、そこのキーパーソンに参加してもらいたい。
- * これからは Feasibility の検討から具体的な議論に進む必要がある。この議論に基づいて体制を考える。（川島）
- * 立ち上がりのために資金を確保しないといけない。走り出せば参加費が入ってくる。もう一つの鍵は、第 1 期生がどういう反応をするかである。資金について 2 プログラムを対象としてとりあえず進める形でどうかと思っている。いろいろな手があるが 22 年度からになってしまう。まずやってみてそのすばらしさを実証すれば国への出資も依頼できる。講師の給与は文科省や経産省から出せる性格の費目である。
- * 動いてみて修正して行くのがよい。5 月までには概略のプランを作ることが必要である。金額の見積りは持田委員にお願いしたい。資金調達の道は桑原会長に指導をお願いしたい。（川島）
- * 「優れた技術者」の意味を明確にするために英語を考えるとよい。また、講師はボランティアであるべきで、必要経費はともかく、謝金は必要か？（奥津）
⇒ よい仕事をしてもらうには然るべき謝金を払うべきと考える。（川島）
- * ECE の実現を図るべく動いてみるべきである。これ以上検討しても先へ進まない。建設関係のプログラムはどうなるか？（桑原）
⇒ 報告書の 2 番目の例は CPD というべきものである。新エネルギーなど将来を見たものがよい。（伊藤）
- * お金の問題を解決しなくてよいのか？（桑原）
⇒ プログラムを開講する前に、仮のチームを作って考え方をまとめるというクッションをおく必要がある。（川島）

3. 平成 21 年度の活動方針の審議

平成 21 年度の活動計画として、二つの WG から提案された計画が承認された。

この計画に基づいて作成された平成 21 年度の事業計画書および収支予算書の案が事務局から提示された。細かい点は 4 月 17 日の理事会までに改定を行ってゆくが、大筋ではこの案が承認された。これに伴い、来年度の会費は本年度と同額となる。

また、かねてから川島委員から指摘されてきた過去の活動成果をいつでも利用可能にしておくべきであるという件については、これまでのすべての報告書を日本工学会のウェブサイトから見えるようにし、このために次の点を盛り込んで CPD 協議会のページを開発することになった。

- 1) 当面（1 年間くらい）はアクセスを CPD 協議会会員に限定し、そのための仕組みを作る。1 年後に状況を見てどうするか判断する。
- 2) ウェブサイト上でリアルタイムに意見交換ができる仕組みを作る。これによって、議論のプロセスを会員が共有できるようにすることを目指す。

CPD ガイドラインに入れる文案

CPD については、各学協会他で積極的な活動が行われている。しかし、その目的は必ずしも画一的に纏まって定義、明確化されていない。工学会としては、今後関連各部門と連携し、議論し、技術者を受け入れる企業はじめ各機関の要請、期待に応える形での CPD の有り方を整理し、受け側の対応の設定を含めて、CPD 活動をより意義ある方向に進めて行くガイド役を果たそうと考えている。

以上